

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

(頭中將に仕える小舎人童と恋仲になった女童は、故式部卿宮の姫君に仕えていた。)

この女童、いかになりにけむ、うせたまひにし式部卿宮の姫君の中になむ候ひける。宮など、とく隠れたまひにしかば、心細く思ひなげきつつ、八条わたりに、人少なにて過ぐしたまふ。上は、宮のうせたまひける折、さま変へたまひにけり。姫君の御かたち、例のことと言ひながら、なべてならず、ねびまさりたまへば、「いかにせまし、内裏などに思し定めたりしを。今は、かひなく」など、思しなげくべし。

小舎人童、八条の宮に来つつ見るごとに、たのもしげなく、宮の内もさびしくすぐげなるけしきを見て、語らふ。「まろが君を、この宮に通はしたてまつら **A**。まだ定めたるかたもなくはおはしますに、いかによからむ。程遥かになれば、思ふまにも参らねば、おろかなると思すらむ。また、いかにとうしろめたき心地も添へて、さまさま安げなきを」と言へば、「さらに今は、さやうのことも、思しのたまはせずとこそ聞けば」と言ふ。「御かたち、めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、飽かぬところおはしまさむは、いとくちをしからむ」と言へば、「あなあさまし。いかでか。見たてまつらむ人々のたまふは『よろづむつかしきも、御前に **B** 参れば、慰みぬべし』と **C**、のたまへ」と語らひて、明けぬれば、往ぬ。

かくいふほどに、年もかへりにけり。君の御方に若くて候ふ男、好ましきにやあらむ、定めたるころもなく、この童に言ふ。「その、通ふらむところは、いづくぞ。さりぬべからむや」と言へば、「八条の宮になむ。知りたるもの候ふれども、ことに若人あまた候ふまじ。ただ、中將、侍従の君などいふ **D**、かたちもよげなりと聞きはべる」と言ふ。「さらば、そのしるべして、伝へさせよ」とて、文取らすれば、「はかなの御懸想かな」と言ひて、持て行きて、取らすれば、「あやしのことや」と言ひて、持てのぼりて、「しかじかの人」とて見す。手も清げなり。柳につけて、

⑤「したにのみ思ひみだるる青柳のかたよる風はほのめかさずや
知らずは、いかに」とあり。

「御返事ならむは、いと古めかしからむ。今やう様さまは、なかなか初めのをぞしたまふなる」などぞ笑ひて、もどかす。少し今めかしき人にや、

④ ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞみだるらむ

今やうの手の、かどあるに書きみだりたれば、をかしと思ふにや、まもらへて居たるを、君見たまひて、後ろより、にはかに奪ひ取りたまひつる。

「誰たがぞ」と掴つかみ捻ひねり、問ひたまへり。「しかじかの人のもとなむ。なほざりにやはべる」と聞こゆ。われも、いかでさるべからむたよりもがな、と思すあたりなれば、目めとまりて見たまふ。⑤ 「同じくは、ねんごろに言ひおもむけよ。物のたよりにもせむ」などのたまふ。

童を召して、ありさまくはしく問はせたまふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひきこゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば」。さるべき折はまうでつつ見しにも、よろづ思ひ合はせられたまひて、わが身も、はかなく思ひつづけられたまふ。

⑥ いとど世もあぢきなくおぼえたまへど、また、いかなる心のみだれにかあらむとのみ、常にもよほしたまひつつ、歌などよみて、問はせたまふべし。

〔堤中納言物語〕による)

注 八条わたり 平安京南部のさびれた地域。

上 式部卿宮の妻で姫君の母。

八条の宮 式部卿宮の遺族が住んでいる邸宅。

若人 若い女房。

中将、侍従の君 女房の名。

「知らずは、いかに」 〔知るや君知らずはいかにつらからむ我がかくばかり思ふ心を〕 (『拾遺和歌集』) による。

問 1 傍線⑦の「さま変へたまひにけり」、⑧の「よろづむつかしき」を、それぞれ十二字以内で現代語訳せよ。

問2

A

B

C

D

に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。ただし、同じ選択肢を複数回使うことはできない。

- 1 なむ
- 2 たし
- 3 さへ
- 4 ばや
- 5 だに
- 6 こそ

問3

傍線①の「安げなき」とは、小舎人童のどのような気持ちか。最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 頭中将がいつまでも定まった相手もなく、独り身であることを、身分柄ふさわしくないと心配する気持ち
 - 2 父親を失い、頼る人もいない式部卿宮の姫君が、ふさわしい相手と結婚できるだろうかと心配する気持ち
 - 3 八条の宮までは遠く、思うように通えないため、女童との仲が疎遠になるのではないかと心配する気持ち
 - 4 八条の宮は手入れをする人もなく、邸内も次第に荒れてきたため、女童も不安ではないかと心配する気持ち
 - 5 頭中将が式部卿宮の姫君のもとに通うようになったとしても、それが長続きするだろうかと心配する気持ち
- 問4 傍線①～⑤のそれぞれの文法的説明として、正しいものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ①の「おはします」は謙讓語で、小舎人童から頭中将に対する敬意を表す。
- 2 ②の「たてまつら」は謙讓語で、女童から式部卿宮の姫君に対する敬意を表す。
- 3 ③の「のたまへ」は尊敬語で、女童から式部卿宮の姫君に対する敬意を表す。
- 4 ④の「候ふ」は丁寧語で、小舎人童から女童に対する敬意を表す。
- 5 ⑤の「はべる」は丁寧語で、小舎人童から中将・侍従の君に対する敬意を表す。

問5 傍線㊦の「したにのみ思ひみだるる青柳のかたよる風はほめかさずや」、㊧の「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につ

けつつさぞみだるらむ」の和歌の贈答の説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 八条の宮の女房たちへの思いを今まで伝えられなかった苦しさを嘆く男に対し、思うにまかせない恋はさぞかしつかつただろうと同情を寄せた返事をしている。

2 八条の宮の寂しい暮らしぶりを聞き密かに心を痛めていると伝えた男に対し、思いがけない人から慰めの言葉をもらったと感謝の気持ちを込めた返事をしている。

3 八条の宮の女房たちのことを密かに恋い慕っていると訴える男に対し、浮気な男はいろいろな女の噂うわさを聞くたびに心を動かすのだろうと皮肉った返事をしている。

4 式部卿宮の姫君への身分違いの恋に苦しんでいると訴える男に対し、姫君は一時の浮気心で言い寄ってよい相手ではないと非難する思いを込めた返事をしている。

5 八条の宮を去って別の屋敷に仕えることを勧める男に対し、宮家への忠義心に欠ける者ならば迷いもするだろうが自分に迷いはないと拒絶する返事をしている。

問6 傍線㊨の「目とまりて見たまふ」の理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 式部卿宮の姫君に言い寄るつてはないものかと、常々思っていたから

2 交際の途絶えた八条の宮から手紙が届いたことを、不審に思ったから

3 式部卿宮の姫君に仕える女房たちの教養を、確かめたいと思ったから

4 式部卿宮の死後間もないのに恋文を送るのは、不謹慎だと思ったから

5 男から取り上げた手紙の筆跡が美しく、和歌も優れていると思ったから

問7 傍線㊦の「いとど世もあぢきなくおぼえたまへど」の理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 八条の宮の寂しい様子を聞き、宮家の生活を助けようとする人がいないことを、情けないと思ったから
- 2 男からの突然の手紙に対し、すぐに返事を送ってきた八条の宮の女房の軽薄さに、失望させられたから
- 3 式部卿宮の姫君に仕える女房の手紙から、姫君の人柄も推測され、期待したほどではないと思われたから
- 4 八条の宮の寂しい様子を聞くにつけ、式部卿宮の生前の宮家のことが思い出され、世の無常を感じたから
- 5 八条の宮の寂しい暮らしぶりから、姫君との結婚を望んでも、周囲の者から反対されるだろうと思ったから

問8 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 式部卿宮の遺志に従い、姫君を内裏に仕えさせよという帝からの命令に対し、姫君の母や女房たちは困惑していた。
- 2 小舎人童は頭中将を式部卿宮の姫君に通わせることを提案したが、姫君は今その心境にないらしいと、女童は答えた。
- 3 小舎人童が帝の御子たちの容貌に物足りなさを感じると言ったことに対し、女童はあきれた物言いだと強く叱責した。
- 4 八条の宮の女房たちは、最初に送られてきた手紙に返事をしないのは現代風で失礼にあたるからと、男に返事を送った。
- 5 男が八条の宮の女房と手紙を取り交わしていることを知った頭中将は、今後も熱心に手紙を送り口説くよう命じた。
- 6 式部卿宮の姫君に心を引かれた頭中将だったが、それも一時の気の迷いと思って自重し、特に行動は起こさなかった。